

1 健康診断の心電図検査でわかることは？

心電図は心臓の電氣的な現象を波形として記録し、その波形から心臓の状態を把握する検査です。健康診断などで通常行われる標準12誘導心電図検査では、心臓のリズムの異常や波形の異常を判定しています。

検査のはなし vol.12

専門医が教える 職場や市町村による健康診断での
検査結果をみたとき 異常値の意味と改善法…22

「心電図」



日本臨床検査専門医会
盛田俊介

2 心電図の異常（リズムの異常）

心臓のリズムの異常は不整脈といい、健診で見つかる不整脈には徐脈、頻脈、上室性期外収縮、心室性期外収縮、心房細動などがあります。

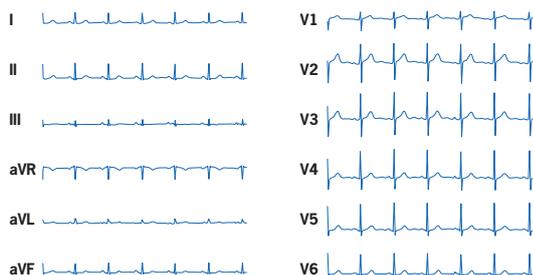
徐脈は通常より脈がゆっくり打つ状態で、脈拍が1分間50～60未満の場合をいいます。脈拍が40程度まで低下し、息切れ・めまい・失神が起こるときは、早急に循環器科の受診が必要です。

頻脈は通常より脈が速く打つ状態で、脈拍が1分間100以上の場合をいいますが、運動や緊張で脈が速くなることは頻脈とはいいません。

上室性期外収縮は心臓上部から余分な電気が発生して心臓を刺激している場合をいいます。また、心室性期外収縮は心臓下部の心室から通常のリズムより速い刺激が出る場合をいいます。これらはほとんどの場合、治療は不要ですが、出現頻度などによっては、治療が必要です。

心房細動は心房内で複数の異常な電気信号が不規則に発生し、その興奮が心室に伝わり脈がバラバラに打つ状態です。心房内に血液の塊ができ、それにより脳梗塞を起こすことがあるので、早めの治療が必要です。

標準12誘導心電図



3 心電図の異常（波形の異常）

健診で見つかる心電図の波形の異常には、異常Q波、QRS軸偏位、R波増高、ST変化、T波異常、心房伝導障害、心室伝導障害などがあります。

異常Q波は心筋梗塞などの際にみられる波形ですが健常者にもみられます。

QRS軸偏位は心肥大や脚ブロックの診断基準として用いられますが、単独では、病的意義は少ないです。

R波増高は健常者（高身長で痩せ型の若い男性に多い）にもみられますが、高血圧のある場合左室肥大の可能性がありえます。

ST変化は心筋の障害などでみられますが、健常者でもみられます。胸痛などの自覚症状がある場合は早急に循環器科の受診が必要です。

T波異常は心筋梗塞や心筋症などさまざまな原因で起きますが、健常者にもみられることもあります。

心房伝導障害には、房室ブロック、WPW症候群などがあり、房室ブロックはその程度により人工ペースメーカーが必要となります。

心室伝導障害には右脚ブロックと左脚ブロックがありますが、心臓の病気がなければ経過観察でよいと考えられます。

心電図が異常を示す主な原因は、冠動脈疾患等の心臓の病気です。一方、体質的なもの、ストレスや睡眠不足、疲労等でも心電図の異常はみられます。ストレスや疲労をためない、睡眠を十分にとるなどの健康管理が大切です。